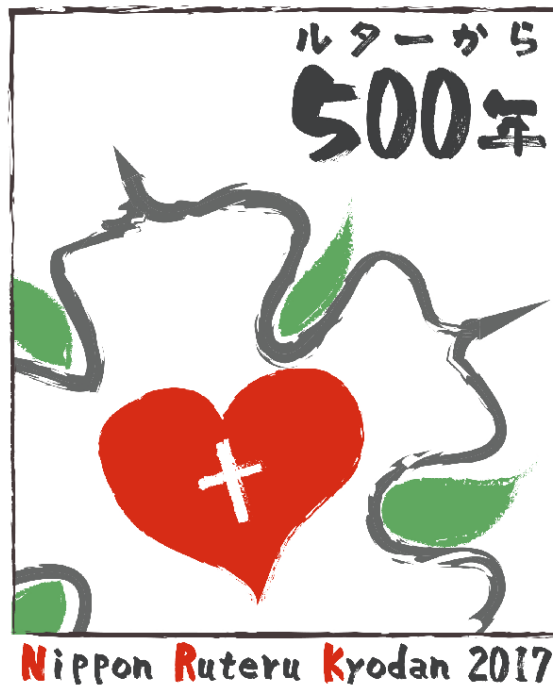


日本ルーテル教団

宗教改革500年記念

聖書通読励ましメール集



目次

巻頭言.....	5
第1回：創世記、出エジプト記.....	6
第2回：レビ記、民数記、申命記.....	7
第3回：ヨシュア記.....	7
第4回：士師記.....	8
第5回：ルツ記、サムエル記.....	9
第6回：列王記.....	10
第7回：歴代誌.....	11
第8回：エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記.....	12
第9回：ヨブ記.....	14
第10回：詩編.....	15
第11回：箴言.....	17
第12回：コヘレトの言葉.....	17
第13回：雅歌.....	18
第14回：イザヤ書.....	19
第15回：エレミヤ書.....	21
第16回：哀歌.....	22
第17回：エゼキエル書.....	23
第18回：ダニエル書.....	24
第19回：ホセア書.....	25
第20回：ヨエル書、アモス書、オバデヤ書.....	26
第21回：ヨナ書、ミカ書、ナホム書.....	28
第22回：ハバクク書、ゼファニヤ書、ハガイ書.....	29
第23回：ゼカリヤ書、マラキ書.....	31
第24回：マタイによる福音書.....	33
第25回：マルコによる福音書.....	34
第26回：ルカによる福音書.....	35
第27回：ヨハネによる福音書.....	37

第 28 回 : 使徒言行録.....	38
第 29 回 : ローマの信徒への手紙.....	40
第 30 回 : コリントの信徒への手紙一、二.....	41
第 31 回 : ガラテヤの信徒への手紙、エフェソの信徒への手紙.....	43
第 32 回 : フィリピの信徒への手紙、コロサイの信徒への手紙.....	44
第 33 回 : テサロニケの信徒への手紙一、二.....	46
第 34 回 : テモテの手紙一、二.....	48
第 35 回 : テトスへの手紙、フィレモンへの手紙.....	49
第 36 回 : ヘブライ人への手紙.....	50
第 37 回 : ヤコブの手紙.....	52
第 38 回 : ペトロの手紙一、二.....	53
第 39 回 : ヨハネの手紙一、二、三及びユダの手紙.....	55
第 40 回 : ヨハネの黙示録.....	57



巻頭言

主のみ名を賛美いたします

このたびは、聖書通読励ましメール集をお開きくださり、ありがとうございます。

ここに収められていますのは、日本ルーテル教団宗教改革500年委員会の企画の一つである「聖書通読」のサポートのために書いたメール集です(2015年11月29日から始まった通読は、2017年10月14日をもって終了しました)。その間、これらの稚拙な文章が、少しでも通読に関わられた方々の助けになったならば、嬉しいです。私自身も、書かせていただくことで、一緒に走り通した気持ちです。振り返りますと感謝でいっぱいです。

ところで、これらのメールは、いわゆる随筆であり、このような形でまとめられるとは、思ってもみませんでした。それなので、別紙になると伺った時、頑なお断りしたことを思い出します。しかし、稚拙さも神さまの赦しのもとで、繰り返し通読される方や再挑戦される方やこれから挑戦してみようとする方に用いていただくならば、御心かもしれません。どうか、このメール集を、神さまの御言葉を読むための、踏み切り板か足ふきマットと思って、お読みいただければ、本望です。

なお、読みづらいところ、表現が間違っているところもあろうかと思えます。どうか、お許してください。また、くれぐれも、分からないこと、疑問に感じられたことは、当該教会の牧師に聞いてください。

最後になりましたが、「聖書通読」を企画してくださり、その推進役を担ってくださった500年委員会委員の皆様、事務局の皆様にご心から感謝をいたします。また、メールサーバーの立ち上げと配信およびメール集編集のために努力してくださった中野智之神学生のために感謝し、祝福をお祈りいたします。

宗教改革500年委員
聖書通読チャプレン 宮澤重徳

第1回：創世記、出エジプト記

主のみ名を賛美いたします

皆さま、明けましておめでとうございます。

聖書通読を始めて、1ヶ月を過ぎました。初めて聖書通読にチャレンジされた方、何回も読まれている方、様々におられることと思います。

回数は違っても、神さまは、読むたびに新しい出会い、福音を聞かせてくださっていることでしょう。新約聖書の世界、特に、主イエス・キリストとのつながり、おいでになった背景が垣間見えて、信仰の世界が広がったのではないかと思います。

現在、皆さまは、通読表通りですと、出エジプト記をお読みのことと思います。

振り返ってみて、創世記はいかがだったでしょうか。天地創造に始まり、アブラハムの祝福、ヤコブやヨセフ物語に触れられて、どんな印象を持たれ、どんな出会いがあり、どんなことが心を打たれたのでしょうか。私自身は、歴史のパノラマを見ているようで感慨深かったです。

また、今読んでおられる出エジプト記はいかがでしょう。モーセと主イエス・キリストとの共通点を見いだしたり、十戒が与えられた背景に頷いたり、ルターが小教理問答書で最初に取り上げた気持ちに共感されているかもしれません。或いは、様々な疑問がわき上がっているかもしれません。

スケジュール通りに読んでおられる方も、これから追い着こうと決心されている方も、当時の人々に感情移入しながら、神さまとの様々な出会いに胸をときめかせて読み続けてくださることをお勧めいたします。特に、これから、律法に触れていきます。律法は読みづらく、しんどいという声も聴きます。けれど、律法の中に秘められた神さまの愛を心に留めながら、根気強く、読み進めてください。

現在、約400人の仲間と一緒に読んでいます。もちろん、私も。多くの仲間と共に、ゴールを目指して走り抜きましょう！

第2回：レビ記、民数記、申命記

皆さま、四旬節に入りましたが、いかがお過ごしでしょうか。

さて、聖書通読を始めて、約3ヶ月が過ようとしています。レビ記を過ぎ、はやくも民数記が終わろうとしています。楽しんで読まれた方もおられるでしょうが、忍耐をもって読み進められた方も多かったのではないのでしょうか。現在、読んでいる民数記の主題は、「イスラエルの人々がシナイ山から『約束の地』までのわずか数百キロにどうして39年近くも費やすことになったのか、そのわけを物語」（「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著）ることでした。また、その間、人口調査が二回行われました（エジプトから脱出した人数と、約束の地に入る人数の調査）。といたしますのも、この旅の間に、イスラエルの民は、神さまに不平不満を吐いて滅ぼされる人々が出て、世代交代が起こり、改めて人口調査する必要が生じたからでした。

また、これから読んでいく申命記は、モーセが語った告別説教が中心になっています。約束の地に入る前に、神さまとの契約を再確認することが目的でした。私たちも、共にモーセの言葉を聞く民の立場に立って、信仰の点検・罪の再認識をするならば、主イエスの十字架の愛の深みに触れることができるでしょう。そうしたことを、心に留めておくと、読みやすいかもしれません。

なお、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第3回：ヨシュア記

皆さま、四旬節も終わりに近づきましたが、いかがお過ごしでしょうか。さて、聖書通読は、ヨシュア記に入ります。ようやく、イスラエル民族は、約束の地へ入ってきます。

では、約束の地は、どのような場所だったのでしょうか。何と、そこは、無人の地ではありませんでした。先住民がいたのです！イスラエルの人々は、神さまの助けを借りて、その先住民から土地を奪い取らなければなりません。手に入れるまでに、大河ドラマさながらの展開が続きます。

前半は、土地取得までの戦いです。その皮切りは、私の好みですが、スパイドラマの一コマを彷彿させるスリリングな潜入～脱出劇です。また、途中、エリコの城壁陥落の出来事も起こります。ぜひ、登場人物の人になってみて、読み進めてください。

後半は、手に入れた約束の地の分配です。他人事だと退屈かもしれません。しかし、「もし、今、日本中の土地をいちど元に戻し、改めてみんな一したがつて私のマイホームのためにも一平等に、くじで再分配する話があったとしたら・・・」（「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著）、退屈では済まされないでしょう。あなたなら、どんな気持ちになるのでしょうか。想像してみてください。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第4回：士師記

皆さま、いよいよイースターが訪れました。主のご復活の喜びのうちにおられることと思います。

さて、聖書通読は、士師記に入りました。当時の英雄たちの登場です。「士師」は原語を直訳すると「治める者」或いは「裁き人」という意味だそうです。「士師」という言葉は、中国から来た言葉です。「①中国古代の、刑をつかさどった官。②イスラエルで、その王国成立前、ヨシヤ以降サムエルの時まで、国難の際に民衆の指導者となった者たち。」（「広辞苑」第三版、岩波書店発行）とあります。彼らは、神さまから立てられた、民の先頭に立

って戦ったり、裁きを行ったりする特別な人々でした。現代風に言えば、ヒーローのような人々です。翻訳した方は、ぴったりの言葉を探されたと思います。彼らは預言者と違い、人間くささがあります。それが、読む側にとっては、魅力かもしれません。

士師の名前は次の通りです。オトニエル、エフド、シャムガル、バラク、ギデオオン、トラ、ヤイル、エフタ、イブツァン、エロン、アブドン、サムソンの 12 名です。あなたは、誰に似ているでしょうか。或いは、誰を身近に感じたり、好きになったりするでしょうか。また、どんな士師のもとで生きたいと思うでしょうか。人を殺す場面が続くので、その点では、読むのが辛いのですが・・・そんなことを想像しながら読み進めるのも楽しいと思います。私も身近に感じる士師がいます。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第 5 回：ルツ記、サムエル記

関東では桜が満開のようです。北海道は根雪が溶け始めた頃ではないでしょうか。皆様におかれましては春の喜びに満たされておられると事でしょう。

さて、聖書通読は、ルツ記、サムエル記へ進みます。ここまで読み進めて来られた方々は、一日二章が習慣になったのではないのでしょうか。また、挫折しつつあるという方も、遅くはありません。ぜひ、これから、一日二章読む習慣を心がけてください。私の例で恐縮ですが、朝のお祈りを終えた後、10～15 分朗読しています。初めは、面倒に感じる時もありましたが、だんだん、歯磨きをするような心地よさになってきました。もちろん、朝でなくても、ランチの後、夕食後のテレビを見る前、就寝前の祈りの後など、皆さんの生活のリズムに合わせてくださったらいかかでしょうか。

さて、ルツ記は4章しかありませんので、読み易いでしょう。また、ルツのひ孫がダビデであり、主イエスの系図に属していることも注目に値します(マタイ 1:15)。更に、ナオミとルツを中心として起こる悲しみと喜びのドラマは、私たちの心を動かすでしょう。

サムエル記は、イスラエルに王が登場し、サウルに始まりダビデからソロモンに至るまでの、イスラエル王国が作り上げられていく様子が報告されています。「なぜ、イスラエルに王が登場したのか」、「神さまはそれをどのように思われていたのか」、「人々が主イエスを『ダビデの子』と呼ぶ場面があるが、彼らは主イエスをどのような方として見ていたのか」、「現在、イスラエルは『ダビデの星』国旗を掲げて紛争を続けるが、彼らの希望はどのようなものなのか」、などど思いめぐらしながら読まれると、楽しみが増えるかもしれません。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第6回：列王記

北海道は、桜が満開だと伺いました。沖縄は、梅雨に入るそうです。日本は、縦に細長く、地域によって様々な趣がありますね。

さて、聖書通読は、5月13日金曜日から列王記に足を踏み入れました。私の目に、列王記は、日本の戦国時代のように映ります。ダビデから始まり、ソロモン、・・・ヨシヤ、・・・ゼデキヤに至るまで、沢山の王様が登場します。日本の戦国時代の武将と重ね合わせて読む楽しみがあるかもしれません。

ただ、悲しいことに、列王記は、イスラエル王国滅亡の記録でもあります。王様の多くは、神さまに罪を犯しました。特に、偶像礼拝が目立ちます。そこで、神さまは、エリヤやエリシャら預言者たちをお遣わしになり、悔い改

めを求められました。ところが、多くの王は、悔い改めませんでした。その結果、ソロモンの没後、紀元前 922 年頃、王国は、北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂してしまいます(列王記上 11～12 章)。更に、紀元前 722 年頃、北イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされてしまいます(列王記下 15 章)。587 年頃に至っては、南ユダ王国まで、バビロニアに滅ぼされてしまいます(列王記下 25 章)。その結果、イスラエル王国は消滅してしまうのです。

主イエスの十字架を思い浮かべながら、読み進めることをお勧めします。王様たちの犯した罪は、現代に生きる私たちの罪にも通じるところがあります。ところが、主イエスは、そんな人間を愛され、全ての人の罪を赦すために、十字架に架かってくださいました。そのことを心に留めて読み進めていただければ、列王記を通して、神さまの愛の深さに気づかされますし、ますます新約聖書とのつながりが鮮明になることでしょう。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第 7 回：歴代誌

梅雨の季節に入りました。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

聖書通読を始めてから半年たちました。皆さん、継続して読んでおられるでしょうか。

中だるみしやすい時期です。戦争が続き、似たようなお話が繰り返され、カタカナが多く、やたらに長い章がある、等々。そのために興味が薄れて、「やめてしまおうかな」「もうこのくらいでいいや」と思われる方もおいでかもしれません。或いは、既に諦めた方もおられるかもしれません。お気持ちをお察しいたします。しかし、諦めないでください。聖書のどこに、神さまからあなたへの宝が埋められているか分かりませんから。

さて、聖書通読は、6 月 10 日金曜日から歴代誌を読み始めます。

歴代誌は、その名の通り、アダムから始まりバビロン捕囚までの歴史のまとめです。神さまは、これまでの出来事を振り返る機会を与えてくださっているのです。ちなみに、歴代誌に記録されている歴史の中心は、ダビデ家とエルサレム神殿・祭司です。

歴代誌を読むことを通して、私たちは、あらためて、自らを滅びに至らせる人間の罪を知るでしょう。また、そんな人間を救うために、救い主イエスを送ってくださるに至った神さまの愛の深さを知るのでしょうか。

読み始めるにあたって、初めの部分は、カタカナの系図が続くので読みづらいいと思います。しかし、安心してください。次第に、物語調になり読みやすくなります。加えて、読み進むにつれ、「あれ？ これ前に読んだ？」などと、記憶がよみがえってくることでしょう。そうなれば、しめたものです。しかも、歴代誌下は、一章一章が短いです！そうこうするうちに、いつの間にか、皆さんは、聖書の約 1/3 を読み終えていた事に気づかれるでしょう！！また、挫折された方も、通読を諦めないでください。聖書は、読み進めるうちに、ますます読みやすくなります。また、繰り返しになりますが、神さまは、皆さんにお一人お一人に、御言葉の宝を埋めておられます。ぜひ、その宝を掘り起こすために、少しずつでも読み進めてください。

ここでも、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第 8 回：エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記

初夏の頃、皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

継続して読んでおられるでしょうか。遅れてしまった、追いつけないという声も伺います。個人的なことを言えば・・・そのような方々は、遅れた部分は後にして、少しジャンプして現在の日付の箇所から読んでもいいのでは

ないかと思っています。そして、インターバルの間に、飛ばした部分を埋めることもできるでしょう。

さて、いよいよ、通読手帳の暦では、7月17日からエズラ記、ネヘミヤ記、エステル記に入ります。歴史が苦手な方も、あともう一息で、歴史書が終わります。登山で言えば、もうすぐ、歴史書の頂上へ辿り着きます！

エズラ記は、捕囚後の出来事です。主な内容は、前半がバビロン捕囚からの帰還と神殿の再建、後半が律法学者である祭司エズラによる「雑婚の粛清」(旧約聖書に強くなる本) 日本基督教団出版局発行、浅見定雄著)です。帰還した捕囚民たちは、サマリア人の妨害を乗り越えて、神殿の再建を進めていきました。

ネヘミヤ記の主な内容は、エズラ記の更に後の出来事です。アルタクセルクセス王の献酌官であるネヘミヤは、主導して荒廃した神殿を再建していきました。彼はユダヤ地方の総督としてエルサレムに着任し、敵対者たちの妨害を乗り越えて、神殿の再建を進めていきました。ここでも、雑婚の粛清があります。

エステル記は、クセルクセス王時代の出来事です。ペルシア王妃になったユダヤ人エステルは、養父モルデカイと共に、自己犠牲を覚悟して、ユダヤ民族の大虐殺を食い止めました。それを記念して「プリムの日」が制定されました。

エズラ・ネヘミヤ記の出来事は、罪によって捕囚された民が赦されてエルサレムを再建できたこと、神さまが迫害を乗り越えさせてくださったことを考えますと、私たちの信仰生活(会堂建築や迫害の中での信仰生活)の信仰の支えになるのではないのでしょうか。また、エステル記は、エステルとモルデカイの自己犠牲を厭わず、民族を救済したことの中に、主イエスの片鱗(もちろん片鱗です。彼らも、罪人であることに変わりはありませんから)を見ることが出来るかもしれません。

繰り返しになりますが、神さまは、皆さんにお一人お一人に、御言葉の宝を埋めておられます。ぜひ、その宝を掘り起こすために、少しずつでも読み進めてください。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第9回：ヨブ記

暑い夏が訪れました。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

継続して読んでおられるでしょうか。歴史を読むのが苦手な方は、これから読みやすくなるでしょう。

さて、8月5日からヨブ記が始まります。ヨブ記は「知恵文学」に属します。主題は”義人ヨブが何故苦しむのか”と考えられますが、「ヨブと言う一個人の苦難を通して、現実における神との出会い、・・・を取り扱っている」（「総説旧約聖書」日本基督教団出版局発行 西村俊昭氏共著）というご意見もあります。

舞台となるウツはエドムとアラビアの地域にあったようです（「ビジュアル聖書百科」いののちことば社発行 ジョン・ドレイン編集）。ですから、登場する人物たちはイスラエル民族ではないかも知れません。神さまを信じる異邦人という可能性があり、私たちに身近に感じられるかもしれません。ヨブはいわゆる不条理の犠牲者です。真面目で一所懸命に神さまを畏れ敬い生きましたが、悪魔が彼を試す事を望み、それを神さまがお認めになりました。自分の行いや思いを超えたところで、不幸な出来事が起こりました。そのために、彼は全てを失いました。それに加えて、エリファズ、ビルダド、ツォファルというヨブの友人たちはヨブを慰めるどころか、むしろ彼を責めて罪の自覚を促しました。加えて、年若いエリフまでもが横から割り入って来てヨブを責め立てました。慰めが与えられない中でヨブは打ちひしがれて

いきました。しかし、最後に、神さまは直接ヨブに話しかけられました。そして、ヨブは神さまのみ業が人間の理解を超えることを悟って悔い改めました。その後、ヨブは彼を責めた友人たちを執り成して、神さまに怒りを鎮めていたいただきました。やがて、神さまはヨブに以前の二倍の財産を与えられました。

ヨブ記はかなり極端ですが、不条理の中で苦しむ一人の信仰者の姿を描いている点で、共感しやすいかもしれません。私たちも、しばしば、信仰生活が続ける中で悲しい出来事や困難に出会い、不条理を感じて嘆くことがあるからです。また、ヨブの祝福は私たちに終わりの日の新しい世での永遠の命の希望を抱かせてくれるかもしれません。すると、ある意味、ヨブ記は私たちの人生への答えであり、慰めであり、希望となるかもしれません。

ぜひ、こうしたことも心にとめて読んでいただければ嬉しいです。そして、信仰生活の慰めや支えらしていただけるよう願っています。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第 10 回：詩編

残暑お見舞い申し上げます。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

さて、8月28日から詩編が始まります。詩編はヨブ記と同じ知恵文学に属します。詩編の原典のヘブライ語の書名は「賛美」として伝承されました。喜びのときも苦難の時も神さまと共に、キリスト共に歩むことが賛美であり、それを表現し続けたのが詩編でした（「新共同訳 旧約聖書注解Ⅱ」日本キリスト教団出版局発行）。大変古いものもあるようですが、書かれた時期ははっきりしません。

詩編は150編から成っています。「旧約聖書に強くなる本」（日本キリスト教団出版局発行、浅見定雄著）によると大きく5巻に分類されます。第一

巻は 1～41 編、第二巻は 42～72 編、第三巻は 73～89 編、第四巻は 90～106 編、第五巻は 107～150 編です。特徴として、第一巻は個人の歌が多く集団の歌が少ないこと、第二巻は個人の「嘆き」の歌と集団の「感謝」の歌が多く、第三巻は個人の歌が少なく、第四・第五巻は「感謝・賛美」の歌が圧倒的に多いことです。また、詩編の特徴の一つは、表題や作者の名前が書かれたものがあることです。ダビデ詩やソロモン詩などという作者の名前が出てきますが、その真偽について、確かなことはよく分かっていないようです。

しかし、そうした学問的なこと以上に、私たちは詩編に親しんできた先達と同じく一篇一篇を自分の生活と重ね合わせて読み進めたいものです。じっくりと、血の通った詩人の言葉として、神さまの御業を誉めたたえ、苦難を嘆いて救いを求めて祈り、恵みを喜び、感謝を捧げたいものです。すると、いつの間にか、読みながら「アーメン」と発声していたり、共感して涙していたりするかもしれません。或いは、様々な発見もされることがあるでしょう。例えば、有名な詩編 22 編のように、旧約聖書のみならず、新約聖書で主イエスが引用された詩もあります。パウロの手紙等、手紙の著者が引用したケースもあります。「あれ、こんなところに!」と思われることがあるでしょう。また、主日礼拝で詩編を交読している教会では、主日礼拝の日課とテーマとの関連を通して秘められた意図を発見するかもしれません。

ぜひ、こうしたことも心にとめて読んでいただければ嬉しいです。そして、信仰生活の慰めや支えらしていただけるよう願っています。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第 11 回：箴言

紅葉の季節になりました。読書の秋です。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

さて、11月16日から箴言が始まります。箴言は、詩編やヨブ記と同じ知恵文学に属します。

箴言という書名は原語のヘブライ語でミシュレ-だそうで、「箴言」という翻訳は文語訳の時代から用いられているそうです。私たちは、この書を通して、悠久の歴史の中で培われたイスラエル民族の知恵に触れることができます。それ自体、楽しみなのではないでしょうか。私たちの日常生活と重ね合わせて聞いている瞬間もあるでしょう。つい、読みながら頷いたり、思わず線を引きたくなったり、苦笑いするかもしれません。

信仰の側面から見ますと、私自身は、この書の要旨が1:7「主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも論しをも侮る」という御言葉に、集約されていると思います。

神さまが人を通して与えられた知恵を、信仰によってとらえていくとき、この書は、私たちの信仰の成長を助けてくれるでしょう。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第 12 回：コヘレトの言葉

寒さが身に染みる季節になりました。北海道では、かなり雪が積もったと聞いています。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

さて、12月4日から「コヘレトの言葉」が始まります。

「コヘレト」は、「会衆を呼び集める人」(旧約聖書に強くなる本)日本基督教団出版局発行、浅見定雄著)という意味です。会衆に対して説かれた人生訓でしょう。

作者は「エルサレムの王、ダビデの子、コヘレトの言葉。」(1:1)とありますので、ソロモンを指しているようですが、はっきりしないそうです(前出)。「コヘレトは言う。なんという空しさ／なんという空しさ、すべては空しい。」(1:2)で言われるように、この書は、人生の空しさを説いています。けれど、同時に、全体の背骨を支えるように「神を恐れよ」(3:14、5:6、12:13)という言葉がちりばめられ、それこそが最上の生き方であることを教えています。また、「何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。」(3:1)以下の御言葉は、私たちが苦難の中にあるとき、慰めを与えてくれるのではないのでしょうか。

ちなみに、私は地上で限られた命を生きる虚しさや儚さについてコヘレトに共感すると共に、

主イエスにある希望を新たにさせていただくのです。皆さんは、いかかでしょうか。

ぜひ、今回も楽しみにして読み進めていただきたいものです。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第13回：雅歌

厳冬の折、皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

さて、12月10日から「雅歌」が始まります。かつて、ある教会で聖書を通読する会がありました。この雅歌が当たったとき、皆顔を赤らめて恥らいつつ読んだことを思い出します。表現の大胆さ、愛の激しさに圧倒されたのです。

ところで、この「雅歌」には、幾つかの説があるそうです。

1. 神さまとイスラエル、または 神さまと教会あるいは神さまとクリスチャンとの愛の関係をうたっている
2. 男女の愛の掛け合いの歌
3. 戯曲化した文学作品
4. 成婚歌
5. イスラエルの王の結婚歌

(旧約聖書に強くなる本)日本基督教団出版局発行、浅見定雄著)

ちなみに、1 がユダヤ教でもキリスト教でも一番古く正当な解釈とされてきたものだそうです。

私自身は1の解釈として読みつつ、二重奏の音楽のように、男女の美しい愛の歌としても聞こえてきます。

様々な読み方が赦されていると思いますので、ぜひ、今回も楽しみにして読み進めていただきたいものです。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第 14 回：イザヤ書

クリスマスが近づいてきました。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

さて、今日（12月16日）から「イザヤ書」が始まりました。

イザヤ書は66章からなり立っていますが、預言された時代は紀元前740年頃から300年にわたるため、一人の預言者がすべて書いたと考えることは困難です。この預言書は三つの預言書(第一イザヤ、第二イザヤ、第三イザヤ)から成り立っていて、それぞれ預言者(たち)と書かれた時代が違うようです。第一部は1～39章、第二部は40～55章、第三部は56～66章です。非常に短く要約すると次のようになります。

第一部(第一イザヤ)・・・紀元前8世紀後半に活動した預言者イザヤの預言とその活動について書かれています。イスラエルはアッシリアによって脅かされていました。そこで、イザヤはイスラエルの民、特にユダ王国と首都エルサレムに向けて預言しました。

第二部(第二イザヤ)・・・紀元前539年にペルシアの王、キュロスがバビロンを占領する直前から活動を始め、バビロン捕囚の帰還の先頭に立った預言者の預言集です。第二イザヤは、ペルシア王キュロスによるバビロンからの解放令の直前とキュロスへの期待が終わり、苦難と失意の中に遭った捕囚の民と祖国の都エルサレムに向けて預言しました。

第三部(第三イザヤ)・・・第三イザヤは第二イザヤの弟子であった人物と考えられますが、紀元前515年前後の数年にわたって第三イザヤの中心部分を形成する幾つかの重要な預言を残しました。それ以外の預言は、複数の著者によって預言されたものと考えられています。第三イザヤは、バビロン捕囚から帰国後、エルサレム神殿を再建中か再建後、生活に幻滅して熱意を失ったか、再び不誠実になっている人々に対して預言しました。(「新共同訳旧約聖書注解Ⅱ」日本基督教団出版局発行 本田献一、関根清三著、「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著 参照)

なお、私自身は預言に込められた神さまの愛に心を打たれつつ、現在の自分の罪と向き合う機会が与えられています。また、終わりの日の希望も新たにされます。加えて、聖書日課でおなじみのイザヤの召命物語(6章)やインマヌエル預言(7章)、苦難の僕(52～53章)、クリスマスの季節に読まれる主の栄光に向けての行進(60章)などを読み返し、改めて救いイエスに出会えた喜びを新たにされます。皆さんはいかかでしょうか。

もちろん、今回も様々な読み方が赦されていると思いますので、ぜひ、楽しみにして読み進めていただきたいものです。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

皆様がこれからも、心を躍らせて、読み続けることが出来ますように、お祈り申し上げます。

第 15 回：エレミヤ書

いよいよ 22 日から「エレミヤ書」がはじまります。エレミヤは、神さまから衝撃的ともいえる召命を受けて、神さまのお支えの中で預言者になりました。エレミヤが活動していた時期は、ユダの王ヨシアの治世の第 13 年（前 627 年）から、バビロンの占領に反抗したグループによって、エジプトへ連行されるまで（前 585 年頃）だと言われています。彼は、歴史の大きな転換点に生きました。古代イスラエル民族の二つの王国のうち、サマリアに都を置く北イスラエルの諸部族はすでに滅んでいました。残されたユダ王国は、一時、宗教的・民族的に復興しつつありましたが、新バビロン帝国に滅ぼされ、バビロン捕囚という過酷な運命に遭いました。そんな中で、偽預言者は耳触りの良い預言をしました。それに対し、エレミヤは、葛藤しつつ、厳しさを伴って悔い改めて神さまに立ち帰るよう叫び続けました。また、バビロン捕囚の人々に、絶望することなく、将来に希望を託し、住んでいる町の平安を求めて生きるように勧めました。私は、エレミヤの預言が現代とかけ離れているように思えません。経済という偶像を神のように敬い、テロや紛争が絶えず、大国の意向に翻弄される現代社会は、エレミヤの時代に生きる人々と似ているように思えてならないのです。エレミヤの預言は、そんな現代社会にも響き渡っているように感じます。だからこそ、エレミヤを通して語られる「わたしのもとに立ち帰れ」（4：1）との神さまの呼びかけに、あらためて耳を傾けたいと思うのです。（「新共同訳 旧約聖書注解Ⅱ」日本基督教団出版局発行 本田献一、清重尚弘著 参照）

なお、私個人としては、「わたしは更に、彼を深く心に留める。彼のゆえに胸は高鳴り、わたしは彼を憐れまずにはいられないと主は言われる」（31 章 20 節）という神さまの憐みに慰められます。また、この憐みによって、主イエスをこの世にお与えになったことを覚え、感謝の気持ちがあふれてきます。

もちろん、今回も様々な読み方が赦されていると思いますので、ぜひ、楽しみにして読み進めていただきたいものです。ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第 16 回：哀歌

通読が進み、「エレミヤ書」を読み終えて、ホッとしておられるのではないのでしょうか。17 日からは、「哀歌」を読みます。「哀歌」の表題はヘブライ語で「エイカ（エイカー）」と読むようで、その意味は、「どうして」という疑問の言葉だそうです。ただ、追悼の意味を含んだ悲嘆の歌の冒頭にも使われるそうです。それで、「哀歌」と名付けられたのでしょう。

文語訳聖書の時代には、「エレミヤの哀歌」と呼ばれていたそうです。ただ、本当にエレミヤが歌ったかどうかは定かではないようです。

哀歌の主題は、神さまのお守りの中で揺らぐことはないと考えられていた都エルサレムの陥落とユダ王国の滅亡に対する嘆きです。また、それに飢餓の苦しみや略奪に遭う悲しみが伴います。そうなった理由は、イスラエルが神さまに犯した罪の結果でしたが、それにしても悲惨です。

文の特徴としては、1～4 章の冒頭がヘブライ語の 22 文字のアルファベットになっている点です。（「新共同訳 旧約聖書注解鑑」日本基督教団出版局発行 本田献一著、「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著 参照）なお、私個人としては、まず、読んでいて、いたたまれない気持ちになりました。経験したことはありませんが、敗戦の焼野原の景色を眺めているようでした。また、イスラエルの罪と自ら罪を重ね合わせ、「主よ、御もとに立ち帰らせてください。私たちは立ち帰ります。」（5：21）と懺悔する気持ちになりました。また、一方で、「主の慈しみは決して絶えない。主の憐みは決して尽きない。それは朝ごとに新たになる。」（3：22～23）という御言葉に出会い、この憐みから主イエスの十字架の贖いを連想し、しみじみと嬉しくなりました。また、「主は決してあなたをいつまでも捨て置か

れないはしない。」(3:31)は、苦しみの中に置かれている者への希望になると感じました。皆さまも、それぞれの立場で、作者の心に触れ、共感し、神さまからの語りかけをお聞きください。ここでも、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第17回：エゼキエル書

三寒四温といわれますが、日々、春が近づいていることを感じます。皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

さて、いよいよ、旧約聖書も終わりに近づいてきました。22日からエゼキエル書が始まります。エゼキエルは紀元前597年から583年の後まで活躍した預言者と考えられています。エゼキエルが生きた時代、既に北イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされ(前722年)、南ユダ王国のみが残されていました。そのユダ王国も、587年には首都エルサレムが陥落しました。その間、新バビロニアのネブカドネツアルは、イスラエルの人々を捕囚としてバビロニアへ連れて行きました。以降、前583年に至るまで、計3回も捕囚されました。エゼキエル自身も、捕囚された一人でした。彼は、その捕囚の最中、神さまから召命を受け、預言者として活動をしました。エゼキエルの預言には、幻と象徴行為が多いです。それらの中には、奇異に映るものも少なくありません。それが、彼の預言の特徴でしょう。これらの預言を通して、エゼキエルは、祖国に残った人々や捕囚地の人々の神さまへの不実と隣人への不義を批判して、悔い改めを求めました。特に、エルサレムの神殿における祭儀の腐敗や偶像崇拜、安息日律法への違反に対して断固とした姿勢をとりました。また、エルサレム滅亡後は、神さまによって民と神殿とが新しくされるという希望を預言しました。(「新共同訳 旧約聖書注解監」日本基督教団出版局発行 本田献一著、「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会聖書研究所 訳注、「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著 参照)

なお、私個人としては、神さまに悔い改めようとせず、偶像崇拜・自然破壊・戦争を起し続けるこの世とどのように向き合うべきかについて、考えさせられました。一方で、37章の復活する骨の預言を読みつつ、新しい世での希望を新たにされました。皆さまも、それぞれの立場で、エゼキエルの預言と生き様を味わってください。ここでも、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第18回：ダニエル書

新潟では、春の花が咲き始めました。皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

さて、3月20日からダニエル書が始まります。だんだん、新約聖書の時代に近づいてきました。

ダニエルは、エゼキエルと同じ頃、バビロンに連れていかれましたが、エゼキエルの後まで活躍したことになっています。

ダニエル書は、前半(1～6章)と後半(7～12章)に大別され、それぞれ書かれた時代が異なると考えられています。書かれた時期は、前半が紀元前4～3世紀頃ではないかと言われます(ただし、書き出しを見ますと紀元前606年に当たるそうです)。後半は146年の前半と考えられています。

内容的に、前半はペルシア時代からヘレニズム時代の初期にかけての異教世界の中で信仰を守り抜こうとしたユダヤ人の教訓話が主体になっています。後半は直面している迫害の終りについての幻と意味が主体となっています。「旧約聖書に強くなる本」である浅見先生は以下の3つのポイントを挙げられています。

- ① 神は忠実な信仰者を決して見捨てない(1, 3, 5章)
- ② 彼らに必要な知恵と洞察とをさずけてくださる(2, 4章と7～11章)
- ③ ①、②を信頼して、どんな困難の中でも最後の勝利を信じて戦うように(12章)

クリスチャンが少数派の日本に生きる私たちは、ダニエルと仲間たちに共感しやすいのではないかと思います。また、参考になる点があるかもしれません。加えて、12章は終末を新たにしてくださるのではないのでしょうか。

(「新共同訳 旧約聖書注解Ⅱ」日本基督教団出版局発行 本田献一著、「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著 参照)

なお、私個人としては、ダニエルの信仰の強さに憧れつつ、ダニエルのような強い信仰に生きられない現実の中で主イエスの贖いの愛と恵みを感じました。また、終わりの日の希望を新たにさせていただきました。加えて、物語好きの私としましては、火の炉やライオンの穴から助け出された有名な出来事を、頭の中で映像化して楽しんでいました。

皆さまも、それぞれの立場で、エゼキエルの預言と生き様を味わってください。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第 19 回：ホセア書

春が近づき、暖かくなってきました。皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

さて、3月26日からホセア書が始まります。ここからは、12小預言書と呼ばれる短い文書が続きますので、息切れしないように読み進めましょう。

ホセアとは「主は救う」「主は救い」を意味します。ホセアは北イスラエルの生まれです。その活動は、ヤロブアム二世以降の数代の王の政治的混乱の時代でした。活動していた時期は、紀元前750年ころから725年ころと言われています。

第一部(1章～3章)、第二部(4章～14章1節)、第三部(14章2節～10節)と大別することができます。第一部はイスラエルの不義と回心というテーマで、不貞の妻が罰を受けたあと回心するという象徴的な預言です。第

二部は同じイスラエルの不義が具体的に描かれています。宣告や罰の予告が章を追って次第に明らかにされ、イスラエルの愛を思い起こさせる預言です。

第三部は神さまの愛が正面に立って脚光を浴び、大団円を迎える預言です。その全体を、神さまの愛が貫いています。

なお、ホセアは、神さまと人間の間を夫婦や親子の間の愛になぞらえて大胆に語った最初の預言者とも言われています。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著 参照)

なお、私個人としては、ホセアの結婚を含めた過酷な神さまのご命令に驚くと共に、預言者として生きる厳しさを感じました。また、14章の前半の御言葉を読み、悔い改めの必要を感じました。また、14章の後半を読んで、主イエスを信じることによって与えられた希望に満たされました。

皆さまも、ホセアの預言と生き様を味わってください。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第 20 回：ヨエル書、アモス書、オバデヤ書

新潟では早咲きの桜が花を開き始めました。皆さまにおかれましては、イースターを待ち望みつつお過ごしのことと思います。

さて、4月2日からヨエル書が始まります。今回は、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書の3預言書についてご紹介します。

ヨエル書

ヨエルの活動の時期はよく分っていません。書かれた年代は三つの説があります。①ユダの王ヨアシュの時代(紀元前9世紀～紀元前8世紀頃)、②バビロン捕囚期後、ペルシア時代末期(紀元前5世紀～紀元前4世紀中頃)、③捕囚期直後(紀元前6世紀後半～紀元前5世紀中頃)です。フランシスコ会聖書研究所は、第三の説が妥当と言っています。

内容は二部に分かれます。第一部(1章1節～2章17節)は、イナゴの大群が著しい農作物の被害をもたらすことが「主の日」の前兆であると預言し、人々に悔い改めを求めます。第二部(2章18節～4章21節)は人々の祈りと嘆願に対する主の答えで、解放と新しい命と救いが約束されます。

アモス書

アモスは紀元前760年頃に活動したと考えられます。主とサマリアや神殿のあるベテルで「神の言葉」語り、北王国の軍師で着敗北と捕囚とを告げました。

内容は4部に大別できそうです。第一部(1章～2章)はおもに神さまが諸国とイスラエルの罪を裁かれるという預言です。第二部(3章～6章)はおもにサマリアとイスラエルの不正義と祭儀の混合に対する審判の預言です。第三部(7章～9章11節)は5つの幻と裁きの説教です。第四部(9章12節～)は裁きの後の回復の預言です。

オバデヤ書

オバデヤは旧約聖書の中で一番短い預言書です。本書がアモス書の後に置かれているのは、編集者がアモス書の延長と考えたからではないかという説があります。活動の時期はよく分かりません。書かれた時期は様々な説があるようですが、紀元前5世紀というのが定着してきているようです。

内容は、前半(1節～18節)がエドムに対する裁き、後半(19節～21節)がイスラエルの勝利と領土回復の預言です。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著 参照)

なお、私個人としては、何れの書も厳しい裁きの預言が多いため、自分の罪深さに打ち碎かれる気持ちでした。また、いずれの預言書も最後の部分で希望が与えられているので、主イエスの憐みと赦しを思い浮かべて感謝しつつ読み通しました。皆さまはいかかでしょうか。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第 21 回：ヨナ書、ミカ書、ナホム書

受難週を迎えました。皆様におかれましては、主イエスの十字架の道行を辿りつつ、喜びに満ちたイースターへ向けてお過ごしのことと思います。

さて、4月12日からヨナ書が始まります。今回は、ヨナ書、ミカ書、ナホム書の3預言書についてご紹介します。

ヨナ書

ヨナは、少なくとも紀元前612年以前に活躍したと考えられます。その年に、ニネベが減ぼされたからです。書かれた時期は、一般に紀元前5世紀以降、遅くとも紀元前3世紀末までに書かれたと考えられます。

内容は、預言者ヨナの活動を通して、神さまの憐みがイスラエルの民だけでなく、悔い改める異邦人にも及んだことが報告されています。

ミカ書

ミカはホセア、アモスと並ぶ紀元前8世紀の預言者です。ユダの王ヨタムからヒゼキヤの時代、すなわち紀元前742年から紀元前687年の間、50年以上にわたって、サマリアとエルサレムについて預言したことになっています。ただし、実際には、北イスラエル王国の終末期であるサマリア滅亡後、アッシリアによってユダ王国が危機に直面していたヒゼキヤの時代に活動したと考えられます。

内容は、国の指導者や立場の高い人々が犯した罪のために、神さまはサマリアとエルサレム、そしてユダに避けることのできない災いをもたらされるという預言です。

ナホム書

ナホムは、ユダ王国滅亡前、アモン、ヨシヤ王の時代と考えられています。それはアッシリア帝国の終り、新バビロン王国台頭の頃にあたる紀元前6世紀頃です。書かれたのは、テーベの滅亡である紀元前662年からヨシヤ王の死である609年の間のようです。

内容は、アッシリアの首都ニネベに対する預言です。ニネベに対して、世界を統べ治められる神さまの正義、倫理と裁きが預言されています。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著 参照)

なお、私は、まず、冒険小説のようなヨナ書を心踊らせながら読みました。そして、ヨナの間味あふれる姿に共感しつつ、悔い改めの必要と御言葉を伝えることの大切さを改めて学びました。

また、ミカ書にも親しみがありません。例えば、5:1の救い主預言です。また、4:3のニューヨーク市の国連本部の向かいにあるラルフ・バンチ公園の「イザヤの壁」(The Isaiah Wall)と呼ばれている平和預言(イザヤ2:4)と同じ預言があります。

また、ナホムは、ニネベの罪を通して、悔い改めを勧めを迫られているように感じます。それと共に、そんな自分のためにも主イエスは死んでくださったことに感謝の気持ちが湧いてきます。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第22回：ハバクク書、ゼファニヤ書、ハガイ書

イースターおめでとうございます！皆様におかれましては、主イエスのご復活の喜びのうちにお過ごしのことと思います。

さて、4月20日からハバクク書が始まります。今回は、ハバクク書、ゼファニヤ書、ハガイ書の3預言書についてご紹介します。もう少しで、旧約が終わります！

ハバクク書

ハバククは紀元前 606 年～604 年頃に活動したと考えられます。

内容については、二つの見方があるようです。ハバククがアッシリアの暴力及び略奪と不真実について訴え、神さまがそれに応えられてアッシリアからイスラエルを救い出すためにバビロニアを興されるという見方です。また、一方で、神さまはイスラエル内部の罪のゆえにバビロニアを興されますが、そのバビロニアが暴力及び略奪を行うのでハバククがそれについて訴えているという見方です。

ゼファニア書

ゼファニアは紀元前 639 年～紀元前 621 年頃に活動したと考えられます。

内容は、2:13 を見ますとアッシリアの滅亡についての預言です。しかし、全体としては、「選民」であるはずのユダの人々の罪に対する主の裁きの預言です。

ハガイ書

ハガイは、ゼカリヤとほぼ同じ時期に活動したと考えられます。1:1 のダレイオス王の第 2 年 6 月 1 日は、紀元前 520 年の 8 月 29 日だそうです。

内容は、神殿の再建と不作～豊作に関する預言が中心になっています。
(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著 参照)

なお、私は、パウロがローマの信徒への手紙で引用している、ハバクク書の「見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」(ハバクク 2:4)を親しみをもって聞きました。そして、ただ信仰によって「正しく」して下さった神さまの恵みに感謝しました。また、ゼファニア書の後半を読みながら、終わりの日の永遠の命への憧れを新たに致しました。更に、ハガイ書では、「この神殿を壊してみよ。三日で建て直して見せる」(ヨハネ 2:19)との主の御言葉を思い出し、復活の体の希望に満たされました。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第 23 回：ゼカリヤ書、マラキ書

全国で春の花が開く季節になりました。新潟は、チューリップが満開です。皆様におかれましては、春の到来と主イエスのご復活の喜びを重ね合わせてお過ごしのことと思います。さて、4月25日からゼカリヤ書が始まります。

今回は、ゼカリヤ書、マラキ書(「聖書通読手帳」には1～4章と記載しましたが1～3章までの間違いです。大変失礼いたしました)の2預言書についてご紹介します。これで旧約は終わりです!

ゼカリヤ書

ゼカリヤは紀元前520年～518年まで活動したと考えられます。紀元前515年の神殿完成を見ずに亡くなりました。内容は、神さまの都であるエルサレムとその神殿に対する愛に基づいた預言です。ゼカリヤは、イスラエルのバビロン捕囚期間後、エルサレム共同体の人々に神殿再建を訴えました。なお、この書は、「約束」と「清め」を主題とする第一ゼカリヤ(1～8章)と「約束」と「審判」を主題とする第二ゼカリヤ(9～14章)に大別されるそうです。第二ゼカリヤは、内容と性格が第一ゼカリヤと異なっており、今日では後代の他の人物による書だということが定説です。

マラキ書

マラキは「わたしの使者」という意味で、多くの学者が架空の人物だと考えているようです。預言の時期は、紀元前515年～紀元前427年頃だと考えられます。内容は、イスラエルに対する愛と悔い改めの勧め、最後の審判の預言です。(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「旧約聖書に強くなる本」日本基督教団出版局発行、浅見定雄著 参照)

私は、なんといっても主イエスのエルサレム入場に引用されたゼカリヤ書 9：9～10 の預言に心が躍りました。また、洗礼者ヨハネの場面で引用されているマラキ書 3：1 の預言を読み、救い主イエスが預言沙汰通りの救い主であるという信仰を強めていただいた思いがしました。ここでも、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。



第 24 回：マタイによる福音書

ゴールデンウィークが終わりました。皆さま、リフレッシュできたでしょうか。

旧約聖書通読、お疲れ様でした。また、新約聖書から通読を始められる方は、これからご一緒に読み進めましょう。

今日から、マタイによる福音書が始まります。

さて、マタイによる福音書の著者は、昔から使徒マタイか徴税人マタイだという説がありました。しかし、現在は、別の人物だと考えられています。はっきり分らないのですが、著者は、旧約聖書を熟知し、ユダヤの習慣に精通していた人物でしょう。ギリシア語に堪能なユダヤ教出身のキリスト者であると推測する学者もいます。また、著者は、幾つかの理由からユダヤ教からの改宗者か、ユダヤ教をよく知っていたキリスト者に向けて書いたと考えられます。

書かれた時代は、マルコによる福音書の後(70 年前後に書かれた可能性が高い)、80 年代であると考えられます。すでにペトロを頭とする教会活動が前提であること、ユダヤ教の会堂から独立して活動していた教会に対する迫害が暗示されることなどが理由として挙げられます。

中心テーマは、旧約の歴史と主イエスを関係づけて、主イエスが旧約を成就する救い主であることを伝えることでしょう。冒頭に系図がある点、随所に旧約預言を「成就する」という動詞が使われている点にも、その意図が現れています。

特徴としては、上記のテーマに基づいて、主イエスが弟子たちと共におられることを強調している点、主イエスの教えが旧約のモーセ五書に匹敵する新しい教えとして打ち出されている点、教会の存在が意識され教会が主イエスの教えを理解し従うことを求めている点などが挙げられるでしょう。その他にも、様々な特徴があります。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」共観福音書 橋本滋男著 参照)

私個人としては、かつて、冒頭の系図が邪魔になってくじけそうになったことを思い出しました。しかし、今回、あらためてテーマや特徴などを考えて読み直すと、マタイの気持ちが伝わって来るような気がしました。また、主イエスが旧約の成就のために来られたことが、改めて心に迫ってきました。加えて、教会生活をする上で、主の教えに(破れつつも)従うことがどれほど大切なのかも学びました。ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第 25 回：マルコによる福音書

聖霊降臨祭が近づいてきました。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。さて、23 日からは、マルコによる福音書が始まります。

マルコによる福音書の著者は、写本や文献には古くから「マルコによる」という表題が付されていて、一般に、本書の著者はマルコであると認められてきました。そして、その人物は、エルサレム教会のメンバーであったヨハネ・マルコ(使 12 : 12、25、13 : 5、15 : 37 他)とも言われてきました。しかし、現在までの研究で、本福音書の著者の人物像は不明です。

書かれた時代は、ローマ軍によるエルサレム包囲と、それに続く 70 年のエルサレム崩壊の前後と考えるのが一般的です。すると、最初に書かれた福音書といえるでしょう。また、著者は、ユダヤ教の習慣を説明していることから、非ユダヤ人に向けて書いたようです。主イエスの死後、約 40 年を経て、主の死と復活を経験していたクリスチャンたちが死にゆく中で、教会のために伝承をまとめて伝える必要があったのでしょう。

中心テーマは、十字架に架かられた受難の主イエスが救い主であることを伝えることでしょう。そのことは、この福音書において、主イエスがエルサレムに入られてからの最後の一週間(11 : 1 以下)の記事が全体の 1/3 を占めていることから明らかです。

構成を考えると、前半と後半に大別できそうです。前半は 1 : 1～8 : 26 です。旧約の終わりを象徴する洗礼者ヨハネと新約を開始する主イエスとの関

係を伝えた後、主イエスがメシア・キリストとして認められていく過程を伝えていきます。後半部は 8 : 27～16 : 8 です。受難、死、復活に向かう主イエスの歩みを伝えていきます。それは、主イエスがメシアであることの意味を明らかにしています。

特徴としては、主イエスの教えに対して、弟子たちがなかなか理解していない点が強調されていることです。また、主イエスのいやしの活動や教えにおいて、彼のメシア性がしばしば隠されていることも挙げられます。しかも、それを主イエスご自身が命じられていることです。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」共観福音書 橋本滋男著 参照)

私個人としては、ご受難の記事を読みつつ、あらためて自分のために死んでくださった主イエスの愛に胸を突かれた思いでした。また、無理解な自分を顧み、ますます御言葉に親しみ祈ることの大切さを痛感しました。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第 26 回：ルカによる福音書

聖霊降臨祭が近づいてきました。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。さて、6月2日からは、ルカによる福音書が始まります。

ルカによる福音書の著者は、異邦人クリスチャンで、ローマの有力者と親しかつたと考えられます(1:1より)。初代教会の伝承では、パウロの宣教旅行と同行者であり、使徒言行録の著者でもある医者ルカが、この福音書の著者であると言われています。また、使徒言行録の著者であるとも考えられてきました。その通りパウロの宣教活動に深くかかわったルカが福音書と使徒言行録の著者であるとする、ルカは創造から始まるイスラエルの歴史を背景に、イエスの誕生から昇天に至る出来事と、それに続く初代教会の宣教活動という救いの歴史の壮大なドラマを書き残したと言えます。

書かれた時代は、一般的に、60年代後半に成立したとされるマルコ福音書よりも後です。また、ローマ軍によるエルサレム包囲と破壊、およびその結果を、かなり具体的に描写しているので70年以降だと考えられます。それらのことから、70年～80年に執筆されたと推測できます。なお、ルカは、異邦人クリスチャンに向けて書いているようです。

中心テーマは、全ての時代と状況に生きる人へ向けた主イエスによる救いについてです。

構成としては、主イエスの公生涯をほぼ三つに分けているようです。第一部は1:5～9:50で主イエスが神から派遣された存在であることが強調されています。第二部は9:51～19:27でエルサレムへ旅する道中が舞台です。第三部は19:28～24:53でエルサレムでの活動から昇天に至るまでです。また、使徒言行録の著者が同一と考えますと、ルカ福音書を「イエスの時」、使徒言行録を「教会の時」と位置付ける見方ができると考えられます。

特徴としては、貧しい者たちに注目していること、食事の場面が多いこと、重要な場面での祈りを強調していること、女性の役割を大きく取り上げていることなどが挙げられます。（「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」共観福音書 橋本滋男著 参照）

ルカ福音書は、一番好きな福音書です（実は、かつて、愛犬に「ルカ」という名前を付けさせていただき、溺愛しました）。特に、貧しい者への主イエスの憐みに感動します。そして、心が動かされます。また、主イエスの弟子であることの厳しさに、身が引き締められる思いです。加えて、女性の弟子が存在したと読める箇所があり、主イエスが男女を等しく見ておられ、宣教の御業のために用いておられることを嬉しく思います。

ここでも、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第 27 回：ヨハネによる福音書

梅雨の季節が近づいてきました。既に、梅雨になられた地域もあるでしょう。新潟は雨が降り肌寒い日が多いです。風邪をひかれませんかのように、祈ります。

さて、6月16日からは、ヨハネによる福音書が始まります。

ヨハネによる福音書の著者は、長い間、使徒ヨハネだと考えられてきました。初代教会の司祭たちも、それを支持する文書を残しました。それが完全に否定されたわけではないでしょう。しかし、現代では、実際にこの福音書を書いたのが使徒ヨハネではなく、ヨハネの思想を受け継いだ弟子、あるいはヨハネの弟子グループに属する人物と考えられています。彼（ら）は、かつて、パウロが開拓した伝道を受け継ぎ、シリア、小アジアという異邦人社会で迫害に堪えながら、その信仰を守り、救い主イエス・キリストを宣べ伝えていったのでしょう。

書かれた時代は、90年から110年までの間とされています。その理由として、エルサレム陥落後の記事と考えられる点、歴史的に85年から90年に起こったクリスチャンに対するユダヤ人の迫害が反映されている点、2世紀半のエジプトのパピルスにこの福音書の断片が記されていた点などです。なお、書かれた場所は、エジプトのアレクサンドリア説、シリアのアンティオキア説、エフェソ説の三つが代表的だそうです。その中で、最も支持が多いのがエフェソです。理由は、反ユダヤ教会堂の記事があること、新約聖書の中で洗礼者ヨハネの洗礼に触れているのはエフェソ（使徒19:1-7）であること、反キリスト・反グノーシスについて議論されている場所としてエフェソが相応しいこと等が挙げられます。

中心テーマは、人々が主イエスを神の子キリストであると信じるためであり、そう信じて主イエスの名前によって命を得るためです（20:31）。また、それに伴い、ユダヤ人たちやキリスト教のグノーシス的異端（知識と訳されるグノーシスを根本主義とする思想。徹底した霊肉二元論に立つ）との論争

に打ち勝つため、迫害下のクリスチャンたちを励ますためでもあったでしょう。

特徴としては、主イエスの素性或使命が共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）よりもいっそう印象的な比喻をもって説明されている点です。主イエスは、人類を父である神へ導く「道」、父を啓示する「真理」、父と一致させる「命」として描かれている点です。また、父の最愛の子、父と人間の仲介者として描かれている点です。

（「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」共観福音書 橋本滋男著、「キリスト教大辞典」教文館発行参照）

ヨハネ福音書は、語彙が少なく、暗示的で、同じような言い回しが多いという印象があります。そのために、読みづらく、分りづらいという方もおられるでしょう。けれど、神さまの住まいが備えられていること（14章）、愛し合う掟（13章）など、慰めと希望に満ちた箇所も沢山登場いたします。そのためでしょう。私は読み返すうちに、主の愛が浮き彫りになるようで、ますますこの福音書に引きつけられ、好きになりました。皆さんも、先入観もたず、まず読み通してみてください。その上で、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、ぜひ、牧師に聞いてください。

第 28 回：使徒言行録

初夏が訪れました。晴れやかな空のもとで、通読されておられるかもしれません。

さて、今日から使徒言行録が始まります。

著者は、ルカによる福音書と同じだと考えられます。また、パウロの伴侶であり弟子であること、ある時期においてパウロと共にいた人物で、医者であるルカと呼ばれる弟子であると考えられてきました。ただし、近年、別の意見も出ているそうです。書かれた場所は、ローマ、アカイアのほかにエフェソ、マケドニアなどがありますが、確定していません。著者がルカである

ならば、異邦人クリスチャンに向けて、イエスの誕生から昇天に至る出来事に続く初代教会の宣教活動という救いの歴史の壮大なドラマを書き残したと言えるかもしれません。

書かれた時代は、ルカによる福音書と同じく、70年～80年に執筆されたという説、ルカの福音書の後となる90年代という説があります。

中心テーマは、いわゆる「教会の時」の記録です。主イエスの復活と昇天、神の民の聖なる都エルサレムでの聖霊降臨による教会の誕生から、異邦人の使徒パウロによって、福音がローマ帝国の中心であるローマにもたらされるまでの様子を述べています。

特徴としては、新約聖書中、もっとも長い文章であるばかりでなく、紀元30年から63年までの33年間にわたる初代教会における重要な歴史的事実を叙述した書でもあり、福音書とパウロ書簡との間に位置し、福音書と密接な関係を持ち、福音書の結論をなすと共にパウロ書簡への入門をなすものです。また、教会が使徒の教えを通して世界に明らかにされた神の神秘であるという点に、特に留意しています。また、ルカによる福音書ですでに強調していた聖霊の働きを重視しています。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」共観福音書 橋本滋男著 参照)

使徒言行録は、初代教会の活動記録です。神さま(特に聖霊)のお守りと導きのもと、教会が生れ、苦しみもがきながら成長していく姿が描かれています。困難な点もありますが、ご自分が一人の弟子になったつもりで、想像しつつ読んでみてください。すると、生き生きした教会の姿が浮かび上がって来るでしょう。私などは、パウロの伝道活動(例えばアレオパゴスの説教)を読んで、私たちの宣教地である日本と類似した点を見出します。そして、パウロに共感します。また、拒絶の中でも、信じる人たちが増えていったことに勇気を与えられます。

ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第 29 回：ローマの信徒への手紙

まだ、梅雨が終わりませんが、地域によっては暑い日々が続いていることと思います。一方で、九州では、水害で甚大な被害が出ています。ご一緒に、神さまのお守りを祈りましょう。

さて、7月15日からは、ローマの信徒への手紙が始まります。

著者がパウロであることは、一般的に広く認められています。新約聖書聖典中パウロの名前によって書かれた手紙は13ありますが、その中で、長さの点からも、内容の点からも、初代教会以来今日に至るまで、新約聖書の全書簡の中でも最も重要なものとみなされてきました。書かれた場所は、コリントではないかと言われていました。

書かれた時代は、パウロがコリントに滞在していた57年か～58年にかけての冬と考えられます。なお、54年～55年の冬という説もあるそうです。中心テーマは、「人間が自分の力で神さまとの正しい関係に入るのではなく、むしろ、自分の無力を認めてキリストを心から信じる者を、神さまがご自分との正しい関係に入れてくださる、義としてくださるのである」ということです。

特徴としては、全ての信じる者を救う神の義の福音が最も明確に鋭く神学的に論じられている点です。ルターは、この手紙を新約聖書の主要部分として受け止めました。ちなみに、「義」という言葉がたびたび登場しますが、この「義」は、人間の倫理的正しさでなく、「神の義」であり、したがって人を義とする支配力としての神の義であると同時に、人間に対する神からの賜物としての義を意味します。人は律法の業によらず、価なしに、神の恵みにより、信仰によって義を受け義に与かるのです。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」パウロの手紙 松永晋一著 参照)

ローマの信徒への手紙は、何度読んでも、私の心を動かします。特に、「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。」(3:21)、「聖書には何と書いてありますか。『ア

ブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた』とあります。ところで、働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされています。しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。」(4:3~5)は、神さまの憐れみ深さを改めて思い出させてくれます。その他にも、「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。」(8:28)など、私の希望の源になっている御言葉があります。

宗教改革500年のこの年、ルターがこの書との出会いによって駆り立てられた宗教改革の出来事を、現代の私たちの現実の生活に当てはめて味わいたいものです。

ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第30回：コリントの信徒への手紙一、二

いよいよ、全国で梅雨明け宣言が出たようです。皆様におかれましては、猛暑のおり、主のお守りのうちにお過ごしのことと存じます。

さて、7月25日からは、コリントの信徒への手紙一、二が始まります。

まず、背景を確認しておきます。コリントは、紀元前9世紀に建てられた都市で、海に面し商業が盛んでした。裕福な都市として知られていたようです。当時の人口は60万人ほどで、ざっくりと、自由人が20万人、奴隷が40万人いたそうです。ギリシャの神々が信じられ、神殿娼婦や男娼がいたようです。また、アテネに近いため、哲学を学ぶ人が多かったようです。

著者がパウロであることは、一般的に広く認められています。パウロとコリント教会との関係は深いようです。パウロは、第二、第三伝道旅行の時に訪問しています。なお、コリントの信徒への手紙は、現在、二通が聖書聖典に入れられています。しかし、多くの学者は、合計四通書かれていて、二通は紛失したと考えているようです。実際、手紙が途中で欠損しているように

読める箇所があります(特に手紙二)。書かれた場所は、コリントの信徒への手紙一がエフェソ、手紙二がマケドニアと考えられています。

手紙一が書かれた時代は、54年～57年、手紙二が57年(54年と言う説もあるそうです)と考えられています。

手紙一は、パウロの第一回コリント訪問後に生じたコリント教会内の内部分裂と混乱に対処するため、またコリント教会の信徒たちから寄せられた質問に答えるために書かれたようです。分裂、結婚と独身、偶像礼拝、教会の秩序、霊の賜物、復活等の問題がとりあげられています。13章には、有名な愛の讃歌が収録されています。

手紙二は、パウロの第一回訪問後、偽教師たちが自分たちこそ真の教師であると吹聴して、パウロに対する不信感を植え付けようとしたことに対応するために書かれたようです。この手紙の大部分は、パウロ自身の誠実さと使徒職についての弁明、敵対者への反論に費やされています。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」松永晋一著 参照)

コリントの信徒への手紙は、約2千年前の具体的な問題に宛てて書かれていますが、それだけではなく、教会で起こる普遍的な問題への回答でもあります。それだけに、現代に生きる私たちにとっても、教会で起こる種々の問題に対処する上で、参考になるでしょう。例えば、教会の中で派閥争いが起こることがあります。秩序が乱れることがあります。或いは、神道や仏教、新興宗教の習慣の中で、どうしたらいいか迷うことがあります。復活に対して、疑問が湧いてくることがあります。読み進めるならば、私たちの信仰生活の道標になるでしょう。

ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第 31 回：ガラテヤの信徒への手紙、エフェソの信徒への手紙

8月の半ばに入りました。暑い日が続きますが、皆さまにおかれましては、主のお守りの内にお過ごしのことと存じます。

さて、今回は、ガラテヤの信徒への手紙、エフェソの信徒への手紙についてご紹介します。

ガラテヤの信徒への手紙

著者はパウロでしょう。6：11では、自筆であることを伝えています。書かれた場所は、エフェソが有力です。また、アンティオキア、コリントという説もあります。

書かれた時代は、52年～54年という説が有力です。

中心のテーマは、「信仰による義」と言えるでしょう。また、それに伴う「キリスト者の自由」でしょう。ルターは、このガラテヤ書から、キリスト者の自由について解き明かしています。

特徴は、論争の手紙であることです。エルサレムから送り込まれたユダヤ人キリスト者たちは、ガラテヤの教会に行きました。そして、割礼を受けるべきこと、ユダヤ宗教歴を採用すべきことを教えたようです。また、彼らは、パウロが、エルサレムの使徒たちからキリスト教を十分に学んでいない未熟な宣教者だと伝えたようです。それに対して、パウロは、反論を展開しているのです。

エフェソの信徒への手紙

著者はパウロ、パウロの弟子という二つの説があるそうです。いずれにしても、エフェソの一教会に宛てて書かれたものではなく、ラオディキアとヒエラポリスのキリスト者に宛てて書かれたものと考えられています。

書かれた時代は、パウロが書いたならば、ローマの獄中書簡と言うことになり 61 年～63 年になります。パウロの弟子が書いたとするならば、更に十年以上後ということになるそうです。

中心のテーマは、教会論(教会とはどういう存在かということ)、教会や家族の一致と調和などです。

特徴は、全体として、神さまを賛美していることです。また、教会や家族の一致と調和のための実践的教えが示されていることです。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」松永晋一著、川島貞雄著 参照)

私にとって、ガラテヤ書は、ルターが「キリスト者の自由」を書いたこともあり、親しみ深い手紙です。また、「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。」(4:19)は、神学生の時に講義の中で教えていただき、今でも自分の欠けを反省しつつ、信仰の原動力になっている御言葉です。また、エフェソ書は、1:20～23 節が私の心を鼓舞してくれます。また、「日が暮れるまで怒ったままではいけません。」(4:26)は、夫婦円満の秘訣になっています。

ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

また、老婆心ながら、熱中症にならないように、水分補給を忘れないようになさってくださいね。

第 32 回：フィリピ^oの信徒への手紙、コロサイの信徒への手紙

8 月の下旬に差し掛かりました。相変わらず暑い日が続きますが、皆さまにおかれましては、主のお守りの内にお過ごしのことと存じます。ちなみに、この時期になりますと、新潟の海にはクラゲが出て泳げなくなります。

さて、今回は、フィリピの信徒への手紙、コロサイの信徒への手紙についてご紹介します。

フィリピの信徒への手紙

フィリピの信徒は大部分が異邦人クリスチャンであったようです。

著者はパウロでしょう。フィリピ教会は第二伝道旅行の際、アジアからこの地へ来て設立したようです。本書は、18世紀まで、ローマにおける軟禁中に書かれたと考えられていました。現在では、エフェソではないかと考えられています。

書かれた時代は、18世紀までは61年～63年、現在では54年～56年と考えられています。

本書には、いくつもの牧会的な配慮に基づく教えがあります。その上で、2：6～11のキリスト讃歌や3：1～21の義認に関する教えなど、極めて重要な教義が含まれています。

特徴は、全体を通して、キリスト教的な喜びが基調にあることです。そこにユダヤ化主義者たちが入り込み、教会に混乱をもたらしたようです。それに対して、パウロはキリスト教に生きる喜びを鮮明に打ち出しつつ、励ましと警告を与えています。また、「主にあつて」という言葉が繰り返し使われ、エフェソの信徒たちが主イエスの贖いの恵みにより神の教会に生かされていることを強調しています。贈り物への言及も、この手紙の特徴の一つです。

コロサイの信徒への手紙

コロサイの信徒も大部分が異邦人クリスチャンであったようです。

著者はパウロと言う説、そうでないという説があります。

書かれた時代は、パウロが書いたならば、ローマの獄中書簡と言うことになり61年～63年になります。そうでないとするとうパウロの死後も考えられるようです。

中心のテーマは、宇宙全体に及ぶ贖いと、宇宙の王であるキリストに関する協議です。特に、先在のキリストと神に満ちているものがキリストにおいて具現化されているということです。

特徴は、異端に関する注意と倫理的勧めが2章にわたって(2:6~4:6)語られていることです。グノーシスとの戦いの書であると考えられます。特に、ギリシャ哲学とアジアの密儀宗教に強く影響されたユダヤ教の異端のようなものが存在し、それに反駁したようです。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」松永晋一著、川島貞雄著 参照)

私にとって、フィリピの信徒への手紙は、特にキリスト讃歌(2:6~11)になじみがあります。また、「わたしたちの本国は天にあります」(3:20)の御言葉には、いつも力づけられます。

コロサイの信徒への手紙は、まず「愛はすべてを完成させるきずなです」(3:14)が好きな聖句で、結婚式の説教に引用させていただくことがあります。また、3:18~21は家訓のような思いで繰り返し読むところです。実際に、コロサイの信徒への手紙はエフェソの信徒への手紙と並んで、「小教理問答書」の「いくつかの聖句による家訓」(『エンキリディオン 小教理問答書』LITON マルティン・ルター著、ルター研究所訳)に多く引用されています。私たちの日常の信仰の生活の参考になるのではないのでしょうか。

ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第33回：テサロニケの信徒への手紙一、二

8月も最後の週になりました。残された新約聖書の厚みは、どんどん薄くなってきました。あともう少しです。

さて、今回は、テサロニケの信徒への手紙一、二についてご紹介します。

テサロニケは、マケドニア州の首都であり、パウロが宣教旅行中に立ち寄ったヨーロッパで最初の大都市であったとされています。ユダヤ人の信徒ヤ

ソンの家で集会を持っていたようであり、敬虔な数多くのギリシャ人と貴婦人たちに加えてユダヤ人たちもいたようです。彼らの信仰は模範的でパウロたちの誇りだったようです。パウロは、その教会に宛てて手紙を書きました。

テサロニケの信徒への手紙一

著者はパウロでしょう。パウロの最初の手紙と考えられています。

書かれた時代は、50～51年頃と考えられています。

中心的な目的は、信仰生活についての勧告を与えること、主の来臨に関する教えを述べることでしょう。特に、主の来臨は突然訪れるので、目を覚ましているように警告しています。目を覚ましているということは、日々、怠らせずに御言葉に生きることでしょう。

テサロニケの信徒への手紙二

これも、著者はパウロでしょう。

書かれた時代は、テサロケの信徒への手紙二の数か月後ではないかと考えられています。

中心的な目的は、第一に、迫害を受けていた信徒への励ましでしょう。神の国のために苦しむ者たちにはやがて永遠の憩いが与えられ、迫害者には破滅が訪れることを告げています。第二に、「主の日はすでに来た」という誤った考えを正すことでしょう。教会の中に、熱狂主義者がいて、彼らは差し迫った主の来臨への期待を口実に怠惰な生活をしていた様でした。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」松永晋一著参照)

テサロニケの信徒への手紙一の最もなじみ深い箇所は、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」(5:16～18)ではないでしょうか。私自身、なかなかできないことですが、目標として心に留めていることです。また、私は、全体を通して、終わり日がいっつも来てもいいように、日々、精一杯生きることの大切さを学びます。ルターが言ったと云われる言葉、「明日世の終りが来ようとも、私は今日、りんごの木を植える」、そのように生きる者でありたいです。これらの手紙も、ぜ

ひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第 34 回：テモテの手紙一、二

いよいよ 9 月に入りました。残暑お見舞い申し上げます。
さて、今回は、テモテの手紙一・二についてご紹介します。

テモテの手紙

テモテの手紙は、牧会書簡と呼ばれてきました。どちらの書も、一個人に宛てたように書かれていますが、教会の牧会者に向けて書かれたと考えられているようです。

著者は、伝統的にパウロが執筆者の助けを借りて書いたとされています。しかし、パウロの名前を使って書いたという説、パウロの弟子またはパウロを尊敬する人が書いたという説もあります。

書かれた時期は、63～67 年の間と考えられます。

テモテという人物は、使徒 16：1～5 によるとリストラとイコニオンの兄弟の間で評判の善い人でした。パウロは、第二伝道旅行の間にテモテの同行を希望し、ユダヤ人に配慮してテモテに割礼を受けさせました。教会の伝承によると、後にエフェソで監督になったそうです。テモテへの手紙は、エフェソの教会を守るために書かれています。

テモテへの手紙一

内容は、異端に対する注意、教会の秩序・制度に関する指示・教会員の関係に関する指示、食欲に関する警告などの具体的な信仰生活の指導について書かれています。

テモテへの手紙二

内容は、伝道的信仰の保持と苦難への勧め、異端に関する注意、福音宣教への勧めなどの具体的な信仰生活の指導について書かれています。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」川島貞雄著 参照)

テモテの手紙は、具体的な教会の在り方について教えていますので、教会形成の上で、大変に参考になります。ただし、女性牧師を認めない根拠(1テモテ2:12)に引用される箇所もあり、書かれた教会の背景を含めて慎重に読まなければならないでしょう。私個人としては、「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。」(2テモテ4:2)を読むたびに励まされます。

これらの手紙も、ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第 35 回：テトスへの手紙、フィレモンへの手紙

残暑お見舞い申し上げます。

さて、今回は、テトスへの手紙、フィレモンへの手紙についてご紹介します。

テトスへの手紙

テトスへの手紙は、テモテへの手紙と共に牧会書簡と呼ばれてきました。一個人に宛てたように書かれています。教会の牧会者に向けて書かれたと考えられているそうです。

著者は、伝統的にパウロが執筆者の助けを借りて書いたとされています。しかし、パウロの名前を使って書いたという説、パウロの弟子またはパウロを尊敬する人が書いたという説もあります。

書かれた時期は、63～67年の間と考えられます。

テトスは異邦人クリスチャンでした。使徒会議の際に、パウロに同行してエルサレムに行きました(ガラテヤ2:1～)。教会の伝承によると、後に暮れ

たで監督になったそうです。テトスへの手紙は、クレタ島の教会を守るために書かれています。

内容は、教会員への健全な信仰生活の指導について書かれています。

フィレモンへの手紙

フィレモンへの手紙は、パウロの手紙の中で最も短く、個人的な手紙です。獄中から書かれた手紙です。当時、動かすことのできなかつた奴隷制度に対するクリスチャンの心構えを教えています。フィレモンは、コロサイの裕福なクリスチャンで、家は集会場になっていたようです。

著者はパウロでしょう。

書かれた時期は、53～55年の初めではないかと言われています。

内容は、フィレモン家にいたオネシモという逃亡奴隷が、パウロの導きによってクリスチャンになり、再びフィレモンのもとに帰るので兄弟として受け入れて欲しいという依頼状です。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」松永晋一著、川島貞雄著 参照)

テトスへの手紙は、テモテへの手紙同様、具体的な教会の在り方について教えていますので、教会形成の上で、大変に参考になります。

また、私は、フィレモンへの手紙を通して、パウロの謙遜さを感じます。読むたびに、一人の兄弟を愛するがゆえに、己を低くできるパウロを尊敬し、見習いたいと思うのです。

これらの手紙も、ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第 36 回：ヘブライ人への手紙

重ねて、残暑お見舞い申し上げます。

さて、今回は、ヘブライ人への手紙についてご紹介します。

著者は、中世の終わりまでパウロと見られてきました。しかし、現代では、パウロではないと考えられています。ただし、多くの学者は、パウロの教えを受け、その思想に培われた弟子の一人ではないかと考えられていそうです。ルカ、シラスと考える学者もいますが、アポロではないかと考える学者もいます。書かれた場所は、ローマ、アレクサンドリア、エフェソ、アンティオキアなどの説がありますが、正確なところはわかりません。受取人は、キリスト教に改宗したヘブライ人です。さらに推測すれば、エルサレムの共同体を中心とするパレスティナのユダヤ人共同体です。

書かれた時期は、パウロの他の主な書簡の執筆後である54年頃からエルサレム滅亡70年までの間と推定しています。アポロが著者もしくは編集者である場合は、50年になるそうです。

内容は、三つに大別できます。神の子として主イエスはすべての天使と古い契約のモーセを遥かに超える者である。主イエスは永遠の大祭司であり、しかも人間に対して思いやりがあり、「罪を犯さなかった以外は、すべてにおいて私たちと同じように試みに遭われた。」(4:15)。主イエスがささげた犠牲は永遠であり、しかもすべての人々のためにただ一度ささげられた。そして、この犠牲をささげた後、天の聖所に入られた。

特徴としては、イエス・キリストを大祭司として描いている点、旧約聖書を貫いた救済史的な面がある点、キリスト論が展開されている点、手紙というより長い説教とそれに末尾に短信が付け加えられているような文体である点などが挙げられます。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所 訳注、「総説 新約聖書」川村輝典著、参照)

私としては、7から10章の主イエスの犠牲による救いがとても分かりやすく感じました。また、11章の救済史も、頭を整理するのに役に立ちました。加えて、「この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができになります。」(ヘブライ7:25)は、私の慰めの聖句の一つです。

これらの手紙も、ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第 37 回：ヤコブの手紙

通読終了までひと月を切りました。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

さて、これからしばらく、共同書簡(ヤコブの手紙、ペトロの手紙一、二、ヨハネの手紙一、二、三、ユダの手紙)を読み進めます。「共同」とは、全キリスト者に宛てられた手紙と考えいいでしょう。今回は、ヤコブの手紙についてご紹介します。

著者は、主イエスの兄弟ヤコブが有力です。しかし、主の兄弟ヤコブの名を借りて別人が書いたという説もあります。書かれた場所は、エルサレムと考えるのが自然です。受取人は、離散しているユダヤ人ですが、広く全キリスト者に書かれていると考えていいでしょう。

書かれた時期は、一世紀後半と考えられます。著者が主の兄弟ヤコブであれば、50年～60年でしょう。また、著者がヤコブの名前と権威を借りて書いたとすれば、一世紀の終わりころでしょう。

内容は、日常生活の苦難や試練に悩むクリスチャンを励まし、また道徳、特に信仰共同体における他者に対する態度を教えています。

特徴としては、「行い」を重視している点、手紙というより長い説教とそれに末尾に短信が付け加えられているような文体である点などが挙げられます。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所発行 訳注、
「総説 新約聖書」日本基督教出版局発行 川村輝典著、参照)

この手紙は、ルターが「新約聖書への助言」という文書の中で『「藁の書」である。これは何ら福音的な性質を備えていない。』(『キリスト者の自由聖書への助言』岩波書店発行、マルティン・ルター著 石原謙訳より)と言っていることで有名です。しかし、私の恩師からお話を伺ったところ、それは、ルターの置かれた時代の状況とルター自身の個性から発しているもので

あり、この手紙が非常に重要なものであることは間違いありません。私自身、「神は・・・人を誘惑なさらさないからです。」(1:13)は信仰の支えになっています。また、「・・・『満腹するまで食べなさい』と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。」(2:16)は、私の行動の支えになっている御言葉です。また、(私の恩師が指摘してくださったのですが)、ボンヘッファーは「罪を告白し合い、互いのために祈りなさい、」(5:16)という御言葉によって、兄妹姉妹がお互いに罪を告白することを勧めていて、私の心に深く響いています(『共に生きる生活』新教出版社発行、ディートリッヒボンヘッファー著、森野善衛門訳)。

この手紙も、ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第 38 回：ペトロの手紙一、二

いよいよ通読終了までひと月を切りました。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。さて、今回は、ペトロの手紙一、二をご紹介します。

ペトロの手紙一

著者は、使徒ペトロだと考えられてきました。冒頭の「イエス・キリストの使徒ペトロ」他、自らをペトロと名乗っているためです。他方、使徒ペトロの死後、ローマの教会がペトロと親しかったシルワノに依頼して、この手紙を書かせたとする説もあります。或いは、別の著者と言う説もあります。宛先は、「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たちへ。」(1:1)とありますが、キリスト者一般と考えていいようです。

書かれた時期は、使徒ペトロによる手紙であれば、殉教前である 64 年頃までにローマで書かれたと考えられます。著者がシルワノであれば、67 年ごろに書かれたという説があります。また、別の著者であれば、90 年代ではないかという説もあります。

内容は、神への賛美に始まり、その神がクリスチャンたちをイエス・キリストの復活を通して新しい命に生きる者にしてくださったことを教えています。続いて幾つかの勧告がなされています。例えば、聖く生きるべきこと、偽りのない兄弟愛に生きること、為政者に服従すること、妻と夫のつとめなどです。また、終りの部分で、試練の中での忍耐、互いに謙遜であることが告げられています。

特徴としては、パウロの影響が多く見られる点が挙げられます。例えば、クリスチャンが主イエスの苦しみに与かることを勧めている点です。

ペトロの手紙二

著者は、冒頭に「イエス・キリストの僕であり、使徒であるシメオン・ペトロから、」とありペトロのように読めますが、疑問視されてきました。それは、本書の重要なテーマである主イエスの再臨の遅延が問題にされているからです。また、ペトロ殉教後、特に70年のエルサレム滅亡後に起こったことや使徒たちが既に他界していることが仄めかされていること(3~4章)、パウロの「すべての手紙」が神の知恵によって書かれたこと(3:15)が記されているからです。そこで、実際に書いたのは、ペトロの弟子かその教えを受け継いだ後代の誰かであると考えられています。宛先は、正確にわかりませんが、ローマから小アジアのクリスチャンと考える学者が多いそうです。

書かれた時期は、90~110年ではないかと推定されます。また、110~150年と言う説もあります。そうしますと、新約聖書の中で、最後に書かれたものと言う点になるでしょう。

内容は、クリスチャンに与えられた神の大いなる約束を思い起こし、努力するよう教えています。また、偽預言者を警戒するよう教えています。最後に、主イエスの来臨が確かであることを説明しています。

特徴としては、再臨の遅れについて書かれている点です。再臨の遅れに不安を抱く教会に対し、理由を説明し、希望を確かにすることによって、やがて来るべき迫害に備えさせたのでしょう。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所発行 訳注、
「総説 新約聖書」日本基督教出版局発行 川村輝典著、参照)

私は、「終わりに、皆心を一つに、同情し合い、兄弟を愛し、憐れみ深く、謙虚になりなさい。悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい。祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです。」(ペトロー 3:8~9)の御言葉に慰められます。また、終わりの日の遅れについて、「愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」(ペトロー二 3:8)という説明に頷かせられます。

この手紙も、ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分らないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第 39 回：ヨハネの手紙一、二、三及びユダの手紙

読書の秋ですね。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

さて、今回は、ヨハネの手紙一、二、三及びユダの手紙をご紹介します。いよいよ、手紙を読み終えます！

これらの手紙の著者は、伝統的にヨハネによる福音書の著者と同質人物と言われてきました。手紙と福音書とテーマや言葉が非常に似ているからです。書かれた場所は、いずれも小アジアのエフェソであることが一般的に認められているそうです。書かれた年代は、90年よりも少し前であると考えられています。

<手紙の内容及び特徴>

ヨハネの手紙一

この手紙は、回覧が目的であったようで、差出人と受取人の名前および挨拶がありません。書き送られた地域の教会には、分裂の問題があったようです。「闇」に譬えられた反キリストを掲げる人々は、主イエスが救い主であ

ることを否定して、教会を分裂へ導いたようです。そこで、著者は、神の子イエス・キリストの受肉と十字架上で流された血による贖いを「光」に譬えて教えています。その上で、誤った教えと行動に引き込まれないように警告し、伝えられた正しい信仰理解を持ち続けると共に兄弟姉妹への愛を実践するように勧めています。

ヨハネの手紙二

この手紙は、「長老」と名乗る著者が一つの教会に宛てて書いた手紙です。手紙一と異なり、当時の手紙形式が型どおりに整っています。著者は、主イエスが肉体をとって来られたことを告白しない「惑わす者たち」と関係を持たないよう警告しています。また、お互いに愛し合うことを積極的に勧めています。

ヨハネの手紙三

この手紙は、手紙二と同じように、「長老」と名乗る著者が、教会の指導者ガイオに書き送っています。長老に反対し、教会の主導権を握ろうとしていた指導者ディオトレフェスという人物がいたようです。彼は、長老が送った宣教師たちを妨害し、また宣教師たちを受け入れようとするクリスチャンたちを教会から追い出していたようです。そこで、著者は、ガイオに、宣教師たちを助け、彼らに暖かく接するように勧めています。

ユダの手紙

ユダの手紙と聞くと、主イエスを裏切ったイスカリオテのユダを思い出しやすいのですが、そうではありません。著者は、自身を「ヤコブの兄弟」と名乗っています。この「ヤコブ」が言い伝え通り、主イエスの兄弟ヤコブであれば、著者は使徒ユダではなく、主の兄弟となります。しかし、その考えには、賛否両論があります。書かれた時代は、一世紀の終わり頃という説、150年以前という説があるそうです。

この手紙は、異端との戦いの書です。神と主イエスを否認する異端が現れましたが、主イエスはこれを完全に滅ぼされます。そこで、著者は、クリスチャンたちも使徒の言葉を思い出し、信仰のために戦い、祈り、終末の希望に生きることを勧めています。

ルターはこの手紙の聖典性を否定し、カルヴァンは受け入れたそうです。カトリック教会では、1548年のトリエント公会議で聖典と認められ、現在ではプロテスタント教会でも認められています。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所発行 訳注、

「総説 新約聖書」日本基督教出版局発行 中村和夫著、川村輝典著、参照)

私は、ヨハネの手紙を読むたびに、現代の「反キリスト」を思い起こします。そして、愛に生きる気持ちを新たにさせていただきます。また、「兄弟を愛する人は、いつも光の中におり」(手紙一 2:10)には、励まされます。

また、ユダの手紙では、「終わりの時には、あざける者どもが現れ、不信心な欲望のままにふるまう。」(ユダ 18)という御言葉を心に留めつつ、現在の状況を重ね合わせて、終わりの日の希望を新たにさせていただきます。

この手紙も、ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

第 40 回：ヨハネの黙示録

宗教改革 500 年まで、約一ヶ月となりました。皆さん、気分は盛り上がって来たでしょうか。

聖書通読は、最後の書になりました!ヨハネの黙示録をご紹介します。

まず、「ヨハネの黙示録」と書名がつけられていますが、どういう意味でしょうか。「黙示」とは、「覆いを取り除く」「明らかにする」などを意味するギリシア語から派生していて、「秘められた真理の表明」という意味があるそうです。すると、「秘められた真理」を明らかにした記録の文書ということでしょう。

ヨハネの黙示録の著者は、自らを「ヨハネ」と紹介しています。二世紀までの伝承はすべて、この著者ヨハネを使徒ヨハネと見做していたそうです。しかし、現在は、異なった人によって書かれたという説もあり、賛否両論です。著者が幻を見たパトモス島で書かれたと考えられますが、現在のような形に整えられたのは、エフェソではないかと言う説があります。

書かれた時代は、ドミティアヌス帝の終り頃、94～96年ごろではないかと考えられています。迫害がますます厳しさを増しているとき、教会に対して、すぐにも起こるべきこの世の終末と完成を告げ、殉教の危機に直面している教会を激励したのでしょう。

構成は、エフェソを中心とする小アジアの七つの教会に送る七つの手紙(1～3章)、ヨハネが見た黙示の本文(4～22章)の二つに大別できるでしょう。

内容は、次のように大別できるでしょう。①救いの歴史の最後の完成を喜ぶ讃歌(神は旧約において、預言者を通して、あらかじめ準備し、告げ知らせた救いの計画を、主イエスとその教会において完成されます。この救いの計画は、地上での救い主のお働きと敵の勢力に対する神の決定的な勝利の後の終末的な場面で実現されます)②救いの源である神(神は被造物の主であり、創造主であり、万物の源、支配者です。神は、過去、現在、未来において、民の終末的な救いのために積極的に働いておられます)。③救いの仲介者である主イエス(主イエスはすべての民を治めるために定められた人の子、またすべての人をご自分の血によって贖った、屠られた小羊。この世に対する神の王権は彼のものです)。④新しいイスラエルである教会(教会は神と主イエスの統治する国であり、この国は悪が一掃された後、初めて完全に確立されます。すでにこの世において、その統治は始まっています。また、教会は地上だけのものではなく、天上のものでもあります。主イエスの受難と復活によって始まった統治は、教会において見られ、完全な実現を目指して未来に向かって発展します。サタンは地上の教会に対して勝つことはあっても、束の間です。悪に対する神と主イエスと教会の決定的な勝利は、神によって計画された人類の救いの完成を示します)。

特徴としては、この文書が預言の書であるとともに、黙示である点です。同じような黙示の形をとるのは、旧約聖書のゼカリヤ書、イザヤ書、ヨエル書、エゼキエル書、ダニエル書などが挙げられます。本書は、それに加え預言書でもあるため、独特な文書になっています。

(「原文校訂による口語訳聖書」フランシスコ会 聖書研究所発行 訳注、
「総説 新約聖書」日本基督教出版局発行 中村和夫著、参照)

ヨハネの黙示録について、私が(皆さんも?)よく質問されるのは、数字についてです。例えば、「六百六十六」(13:18)です。神秘的で、ホラー映画にも使われています。しかし、これはカイザル・ネロ(皇帝ネロ)のヘブル語字母の、それぞれの個数の総和だそうです。また、「十四万四千人」(7:4)は、この人数しか救われないというのではなく、完全数12に12部族を掛け合わせた数字です。それ以外にも、様々な数字や難解で暗示的な表現が登場しますが、魔術的に受け止めるのではなく、研究者の成果を参考に読むことをお勧めします。

私は、「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。・・・そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものとは過ぎ去ったからである。』」(21:1~4)を読むたびに、希望と力を与えられます。また、すでに召された先輩たちを思い出し、再会の楽しみを思い浮かべます。また、「汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れる。」(21:27)を読むにつけ、罪に汚れた者で新しい世界には相応しくない者でありながら、主イエスの十字架と復活によって自分の名前も「命の書」に書かれていることを信じ、感謝しつつ、しみじみと神さまの恵みを思い巡らします。この文書も、ぜひ、楽しんで読み進めてください。なお、読み進めるうちに、分からないこと、疑問に感じられたことは、牧師に聞いてください。

